

## 第二章 落葉宮の物語 律師の告げ口

[第一段 夕霧の後朝の文]

かやうの歩き(このような求愛のための外出に)、慣らひたまはぬ心地に(馴れていらっしやらない大将は)、をかしょうも心尽くしにもおぼえつつ(今後の展開を楽しみにも気懸かりにも思いつつ)、殿におはせば(とのおはせば、三条の自邸にお戻りになったのでは)、女君の、かかる濡れをあやしと咎めたまひぬべければ(夫人がこのような締まりの無い姿をあやしんで煩く言いなさりかねないので)、\*六条院の東の御殿に参うでたまひぬ(実家の六条院夏の御殿に参上なさいました)。\*「ろくでうのみんなのひんがしのおとど」は注に<花散里のもとをさす。夕霧の養母。>とある。大将にとって<実家>に当たる。実は三条邸が大将の生家だが、改築もしたし、何より祖母が他界している。

まだ朝霧も晴れず(到着した時分は、まだ朝霧も晴れておらず)、まして\*かしこにはいかに(街中でこうなのだから、まして小野山荘ではどんなに霧深いだろうかと)、と思しやる(と大将は思い遣りなさいます)。\*「かしこ」は<小野山荘>らしい。上文では三条邸も引き合いに出していたので、代名詞の語調が微妙に分かり難い。

「例ならぬ御歩きありけり(いつにない御忍び歩きがあったんですね)」と、人びとはささめく(と実家の女房たちはささやきあいます)。

しばしうち休みたまひて(大将は暫くお休みになってから)、御衣脱ぎ替へたまふ(御着物を着替えなさいます)。常に夏冬といときよらにしおきたまへれば(養母の花散里はいつも大将の夏服と冬服をきちんと用意なさっていらっしやったので)、\*香の御唐櫃より取う出て奉りたまふ(香木を入れて仕舞い置いた御衣料箱から季節柄の服を取り出して御揃え申し上げなさいます)。御粥など参りて(そのように大将は着替えを済ませて、お粥などを召し上がってから)、\*御前に参りたまふ(源氏殿の御前に御挨拶に参上なさいます)。\*「かうのおんからびつ」は注に<『集成』は「香を入れて、収めた装束に匂いを移らせる唐櫃」。『完訳』は「香を着物に移らせるための唐櫃」と注す。>とある。\*「おまへにまゐりたまふ」は注に<源氏の御前をさす。挨拶のためである。>とある。意外に分かり難い文で、従いたい。大将が主語の「御前に参る」という言い方は、他ならず<六条院の主人の殿の前に何う>という意味になりそう。ただ、それにしても此処の文の全体は、「常に～奉りたまふ」までが花散里の主語と成る挿入句の構文、ということだろうか、「御粥など参りて」から主語が大将に戻る、ということのようで、そのように構文を認識しないと文意が掴めない、という分かり難さではある。

\*かしこに御文たてまつりたまへれど(大将は山荘の宮に後朝のお手紙を差し上げなされたが)、御覧じも入れず(宮はお読みになりません)。\*注に<源氏のもとに行く前に夕霧は手紙を小野に差し出したもの。場面は小野に移る。「御覧じも入れず」の主語は落葉宮。>とある。

にはかにあさましかりしありさま(急に露骨になった大将の態度を)、めざましうも恥づかしょうも思すに(心外にも恥づかしくもお思いなので)、心づきなくて(嫌気が差して)、御息所の漏り聞きたまはむことも(母御息所が昨夜の大将との事を聞き知りなされることも)、いと恥づかしょう(とても気が引けるが)、また(一方では)、かかることやとかけて知りたまはざらむに(こうした事情

を全くご存じないままで)、ただならぬふしにても見つけたまひ(周囲の変化から何かあったようだとお気づきになり)、人のもの言ひ隠れなき世なれば(人の噂に戸も立てられず)、おのづから聞きあはせて(それらを思い合わせて)、隔てけると思さむがいと苦しければ(私が母君に隠し事をしてしていると御思いなさるのも全く不本意なので)、

「人びとありしままに\*聞こえ漏らさなむ(女房たちがありのままを話し聞かせてくれたら良いのに)。憂しと思すともいかがはせむ(困ったこととお思いになっても仕方がない)」と思す(とお思いになります)。 \*「聞こえ漏らさなむ」の「なむ」は内心文で使われる<願望の終助詞>らしく<「なも」の音転、活用語の未然形に付く。>と古語辞典にある。

親子の御仲と聞こゆる中にも(親子の仲という親しい間柄の中でも)、つゆ隔てずぞ思ひ交はしたまへる(この母子は少しも隠し事が無くていらっしゃいます)。よその人は漏り聞けども(他人が聞き知っても)、親に隠すたぐひこそは(親には隠す場合などが)、\*昔の物語にもあめれど(昔話にもあるようだが)、さはた思されず(宮はそのようには決してお考えになりません)。 \*「昔の物語にもあめれど」は注に<『完訳』は「他人には知られても親には隠しだてをする話。『伊勢物語』や『平中物語』などに多い」と注す。「あめれど」の主体は語り手。>とある。

人びとは(女房たちは)、

「\*何かは(どうして)、ほのかに聞きたまひて(御息所が昨夜の事を少しお聞きになって)、ことしもあり顔に(さも何かあったように)、とかく思し乱れむ(あれこれと思ひ悩みなさる必要があります)。まだきに(まだ情交は無いのだから)、心苦し(今からお話し申すのは、御病状に障るか心苦しい)」 \*「何かは」は反語表現の副詞らしいが、一般的な否定というよりは<何も其処までする事は無い>という制止語の語感だ。つまり、女房たちは御息所に事情説明をしない。それは御息所の病状を案じて負担を掛けないという配慮、かと思うが、宮が「にはかにあさましかりしありさま、めざましうも恥づかしう」と思っていることを察すれば、側近が事態の重大さを認識しないでどうするのか、と私は思う。「まだきに心苦し」などという女房の手前勝手な判断は僭越だ。

など言ひあはせて(などと話し合っ)、いかならむと思ふどち(二人の展開に興味津々の者たちは)、この御消息のゆかしきを(この大将のお手紙を)、ひきも開けさせたまはねば(宮が封もお切りにならないのが)、心もとなくて(じれったく思っ)、

「なほ(やはり)、むげに聞こえさせたまはざらむも(全くお返事申し上げなさらないというのも)、おぼつかなく(気懸かりで)、若々しきやうにぞはべらむ(失礼かと存じます)」

など聞こえて(などと宮に申し上げて)、広げたれば(手紙を広げると)、

「あやしう(慌てて分けも分からず)、何心もなきさまにて(何の心構えも無しに)、人にかばかりにても見ゆるあはつけさの(男の人に例えあれだけのことにせよ直に対面したというはしたなさ)、みづからの過ちに思ひなせど(自分の至らなさと考えてみても)、思ひやりなかりしあさましさも(配慮の無い大将の無礼も)、慰めがたくなむ(納得できません)。え見ずとを言へ(私は読まないと言先方に言って遣りなさい)」

と(と宮は)、ことのほかにて(是だけは受け付けなと)、寄り臥させたまひぬ(拒んで後ろを向いて横たわってしまいなさいました)。

さるは(ただ、大将の文面は)、\*憎げもなく(強引さのない上品さで)、いと\*心深う書いたまうて(とても教養高く書いていらっしやって)、 \*「憎げもなく」は<『集成』は「とはいえ。落葉の宮のご不興にもかかわらず、というほどの含み」と注す。語り手の夕霧弁護の句。>と注にある。そこで、「憎げ」を大将の増長した強引さ、みたいに考えてみる。が、宮にしてみれば、あのような態度に出た大将が許せない、との思いなのだから、文面に関わらずく憎らしさが無い>ということには成らず、注には「夕霧弁護の句」としてあるが、語り手が自分の思い入れで大将の肩を持つ理由は無いので、この「憎げ」は<無作法さ＝強引さ＝粗野＝下品さ>を示す一般形容語用と見るべき、かと思う。 \*「こころふかう」は、渋谷訳文に<心を込めて>とあり、与謝野訳文には<配慮深く>と取っている節がある。が、この「心」は<素養、教養>の意だ。そのことは下文に古今集の和歌引用が多用されることで証明されるので、子細は後述する。

「魂をつれなき袖に留めおきて、わが心から惑はるるかな (和歌 39-07)

「恋の虜にさせられて、如何して良いか分からない (意識 39-07)

\*注に<夕霧から落葉の宮への贈歌。『河海抄』は「飽かざりし袖の中にや入りにけむ我が魂のなき心地する」(古今集雑下、九九二、陸奥)を指摘。>とある。当歌の「袖」と「魂」の印象深い取り合わせは、この引歌ないしその類を明らかに下敷きしている。早速に「古今和歌集の部屋」サイトの992番のページを頼ると、この歌の詞書は「女友だちとものがたりして別れてのちにつかはしける」とある。詠み手とされる陸奥(みちのく)は<生没年不詳、古今和歌集に採られているのはこの一首のみ。従五位下・橘葛直の娘とされる。葛直は大和介(881年)〔奈良県〕や石見権守(894年)〔島根県〕に任じられたようだが、陸奥の国〔宮城・岩手・青森県〕の国司になったという記述はない。>と解説されていて<娘＝女>であるらしい。が、女が「女友だちとものがたりして」と前振りして歌を詠む感性は、私には分かり難い。今なら女にも公務(狭義の公務員ではなく広義の社会的業務)に就いて実績を重ねる生き方もあるので、何かの転機や転職の折に同僚と人生を客観的に語る事はあるのかも知れないが、当時は、今でも基本的には変わらないと思うが、女は生死往来発着および出産子育てという、社会的業務以前の、またはその土台の、日常生活の連続性の中で生きていて、勿論そのそれぞれに節目はあるが、その意味は連綿と続く個体の主体性の中にあるので、井戸端会議こそがその社会性を確認する場であり、事改めて<物語る>のは空々しい、ように思える。また、「女友だち」が誰かも分からないとの事。で、この歌の背景や詠み手の基本的な立場が分からないので、言葉の表面だけで読む他は無いが、一応試みる。「あかざりし」は<明かさなかつた、打ち明けなかつた>。「袖の中」は<胸の内>と<手の内>を含意した言い方。で、「開かざりし袖の中にや入りにけむ」が<あなたの恋の術中にはまって>となり、「我が魂のなき心地する」は<まるで生気を抜かれた虜のようだ>。レズビアンもあるとは思いますが、陸奥が伏せ名にも思える。さて、当歌だが、「袖」と「魂」は引歌の歌意をそのまま引いているに違いない。その上で、「わが心から惑はるるかな(本当に困っています)」と泣きを入れているのだろう。

\*ほかなるものとはか(思わぬ事をしてしまうのが恋心だとか)、昔もたぐひありけりと思うたまへなすにも(昔の歌にも似たようなことがあったと考えて見ますが)、\*さらに行く方知らずのみなむ(さらに古歌にもあるように、それでもこの気持を如何して伝えたら良いのか分かりません)」 \*「ほかなるものとはか」は注に<以下「さらに行く方知らずのみなむ」まで、歌に続けた手紙文。『奥入』は「身を捨てて行きやしにけむ思ふよりほかなるものは心なりけり」(古今集雑下、九七七、躬恒)を指摘。>と

ある。古今和歌集 977 番を Web 検索すると、この歌には「人を訪はで久しうありける折に合ひ恨みければ詠める(その相手を訪ねずに久しくなった時に、その原因となった行き違いが残念に思えて詠んだ歌)」という詞書がある、と知れた。「あひうらみければ」の接頭語「あひ」を<互いに、共に>の意味に取っている解釈のページもあったりするが、此処の「あひ」は対象体に相対して<正にそれ自体>という意味で、ざっと強調語とも思えるが、「相成る」や「相変はらず」などの例と同様に、むしろ<ちょうど其相応に合致する認識=合い>という具体性を示す言い方なのだろう。「うらむ」は<残念に思う>。「けり」は<今思えば~だった>という回想の助動詞で、その已然形「けれ」は思考文だが仮定ではなく実感したことを示す言い方。で、此処の「あいうらみけり」は<ちょうど其の事を残念に思った>という言い方。「其の事」とは<会わなくなった原因の出来事>だ。即ち、引歌の歌意は<心此処にあらずで変な事をしてしまったが、いざとなると体を捨てて行ってしまおうかと思わぬことをしてしまうのが恋心というものらしい>という反省と言い訳の弁なのだろう。しかし、凡河内躬恒(おほしかふちのみつね)は相手の女とはよほど素直に謝れない関係にあるみたいだが、こんな風に気取って格好付けていたら、何時になっても会えないんじゃないかと、他人事ながら危惧する。それとも、この歌詠みを気が利いていると女の方が惚れ直した、とか言うんだらうか。さすがに自惚れも過ぎると呆れるが、躬恒が天性の色男で女が夢中だったのなら、そういうこともあるのかも知れない。しかし、大将は如何なんだろう。\*「さらにゆくかたしらず」は注に<『一葉集』は「我が恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行く方もなし」(古今集恋一、四八八、読人しらず)を指摘。>とある。「さらに」は<重ねて、その上に>と<これも古歌にあるように>の掛詞の洒落語用なのだろう。歌意はざっと、募る思いを如何して伝えて良いか分からない、くらいか。また、こうした古今集を引き倒した文面が「いと心深う」なら、この「心深う」は<配慮が深い>のではなく<教養が深そうに>という言い方であり、「憎げもなく」は<粗野で無しに→上品に>という言い方になる。

など、いと多かめれど(などととても多言の文面らしいが)、\*人はえまほにも見ず(脇から覗く女房にはとてもじっくりと読む事は出来ません)。\*「人はえまほにも見ず」は<女房は正面から手紙を見ることができない。>と注にある。

例のけしきなる今朝の御文にも\*あらざめれど(情交があった後の通常の後朝の御手紙のような親愛の情を示す文面とは違う筈だが)、なほえ思ひはるけず(どういう内容かはっきりとは分かりません)。人びとは(女房たちは)、御けしきもいとほしきを(大将の御手紙を御覧にならない宮の御様子を)、嘆かしう見たてまつりつつ(心配に思い申し上げながら)、\*「あらざめれど」は、存在表示動詞「あり」(の未然形「あら」)+打消しの助動詞「ず」(の連用形「ざり」)+推定の助動詞「めり」(の已然形「めれ」)+逆接確定条件を示す助詞「ど」からなる言い方。「めれど」は漠然とした推量ではなく、具体的な判断材料に基づく推定を意味していて、それは、女房たちが昨夜の宮と大将との間に情交がなかった事を知っているという事情からして、女房たちが<普通の内容である筈が無い>と思った事を説明した語り口なわけだ。側近女房は遠巻きながら、現場を見ていただろうし、宮の身の回りを世話すれば服の汚れや始末の紙などで、情交の有無は知れてしまう。高貴な女に個の秘匿は無い。その代わり分厚い人介の保護管理体制がある。

「いかなる\*御ことにかはあらむ(お二人はどのような御関係になるのでしょうか)。何ごとにつけても(何れにせよ)、ありがたうあはれなる御心ざまはほど経ぬれど(有難い親身な御面倒見はだいたい続いてきましたが)」\*「おんこと」が何を指すのか分からない。御文面の話題は済んで、宮の大将を拒む態度を見ながら、女房が考えること、となると、二人の関係の行方、に関心が集りそうだ。大将の援助は自分たちの実入りにも直結するから、切実な問題かも知れない。「あらむ」の語感は<どうなっている>という<現状推量>

が強いが、その現状の原因や意味を考えれば<将来予測>に繋がるので、事態が<どうなる>という言い方にもなるかと思う。

「\*かかる方に頼みきこえては(結婚してみると)、見劣りやしたまはむ(期待外れなさるかも)、と思ふも危ふく(と思うと不安で)」 \*「かかる方」は<夫としての意>と注にある。かくあるべくある方=正式な結婚相手、という言い方だろうか。であれば、「頼みきこえて」の主語は宮であり、であれば、「見劣りやしたまはむ」の主語も宮、ということだろうか。であれば、実際に結婚すると期待はずれかも、みたいな蔭口だろうか。一応それで意味は通りそうだから、そうして置くが、女房の立ち位置や思い込み具合が分からないし、だから文意も落ち着かないし、実に分かり難い文だ。

など、睦まじうさぶらふ限りは(などと昨夜の事情を知る側近女房たちだけは)、おのがどち思ひ乱る(自分たち同士で心配していました)。

[第二段 律師、御息所に告げ口]

御息所もかけて知りたまはず(御息所も全くこのことをお知りなさいません)。もののけにわづらひたまふ人は(物の怪に患っていらっしゃるこの人は)、重しと見れど(重病かと思えるが)、さはやぎたまふ隙もありてなむ(小康状態の日もあって)、ものおぼえたまふ(正気にお戻りになることがあります)。日中の御加持果てて(昼の加持祈祷が済んで)、阿闍梨一人とどまりて(高僧の阿闍梨一人が居残って)、なほ陀羅尼読みたまふ(さらに呪文を唱えていらっしゃる)。よろしうおはします(高僧は御息所が小康でいらっしゃるのを)、喜びて(喜んで)、

「大日如来\*虚言したまはずは、などてか、\*かくなにがしが心を致して仕うまつる御修法、験なきやうはあらむ(大日如来は嘘を仰いませぬので、如何して、この私が心を込めて御唱え申した経文に靈験の無い事が有りましようや)。悪霊は執念きやうなれど(悪霊は執念深いようでも)、\*業障にまとはれたる\*はかなものなり(業に取り付かれた気弱な亡者に過ぎませぬ)」 \*「そらごと」は<嘘>。 \*「かくなにがし」は<この私>と自負を示す言い方なのだろう。阿闍梨は、大日如来の教えを記した経文を間違いなく唱える修行を積んだ、と実績ある仏門権威から認定された者の称号、という自負自覚なのだろうか。分からない世界だ。 \*「業障(ごふしゃう)」は<仏教に於いて言うところの、正道を妨げる強欲>とのことらしく、ざっと<激昂して道を誤まること>あたりだろうか。 \*「はかなもの」は<弱者>。語調に悪乗りして<亡者>と言いたかったので<気弱な>を付けてみた。

と、声はかれて\*怒りたまふ(と声はしわがれて厳しくなさいます)。いと聖だち(とても世間離れた)、すくすくしき律師にて(率直な修験師なので)、ゆくりもなく(唐突に)、 \*「いかる」は<厳しい態度をする>ということらしい。

「そよや(それはそうと)。この大将は(大将殿は)、いつよりここには参り通ひたまふぞ(いつから宮様の所に参り通っていらっしゃるのですか)」

と問ひ申したまふ(と尋ね申されます)。

御息所、

「さることもはべらず(御二人は通いの仲ではございません)。故大納言のいとよき仲にて(大将殿は故大納言の親しい友人で)、語らひつけたまへる心違へじと(故人の遺言に背くまいと)、この年ごろ、さるべきことにつけて(この数年、何かにつけて)、いと\*あやしくなむ語らひものしたまふも(それはただならず親切にして下さって)、かくふりはへ(このようにわざわざ)、わづらふを訪らひにとて(私の病状を御見舞にと)、立ち寄りたまへりければ(立ち寄り下さったので)、かたじけなく聞きはべりし(有難く思っております)」 \*「あやし」は<ただならず>。「語らふ」は<親しく相談する>。みたいな言い方のようだが、実際には相当な物資援助を受けていて、大将が援助を申し入れて、その内容を相談するのだから、実態は一方向的に頼る関係で、「あやしくなむ語らひものしたまふ」は相当に御息所が見栄を張った言い方に聞こえる。

と聞こえたまふ(と申しなさいます)。

「いで、あな\*かたは(いや、何と笑止な)。なにがしに隠さるべきにもあらず(私に御隠しある必要はありません)。 \*「かたは」は<見苦しい>という形容動詞の語幹だろうか。「かたはらいたし」の簡易語用かも知れない。随分きつい語調に思えて、御息所に対してどのくらいの言い方なのか計りかねるが、世間離れしていて無礼な態度や失礼な物言いをする者は修験者は居るにしても、御息所と話が出来ること自体がこの僧の身分の高い家柄の出を示していそうだ。

今朝、\*後夜に参う上りつるに(今朝、後夜の勤行に参上しました折に)、かの西の妻戸より(あちらの西の妻戸より)、いとうるはしき男の出でたまへるを(とても立派な男が出ていらっしゃるのを)、霧深くて、なにがしはえ見分いたてまつらざりつるを(霧が深くて私には誰と見分けがつかせませんでした)、この法師ばらなむ(この山荘に詰めている法師たちが)、『大将殿の出でたまふなりけり(大将殿のお帰りのようだ)』と、『昨夜も御車も返して泊りたまひにける(昨夜にしても御車まで返してお泊りになったのだ)』と、口々申しつる(口々に申ししていました)。 \*「後夜(ごや)」は<六時の一。寅(とら)の刻。夜半から夜明け前のころ。現在の午前4時ごろ。また、その時に行う勤行(ごんぎょう)。夜明け前の勤行。>と大辞泉にある。

げに(確かに)、いと香うばしき香の満ちて(とても薫り高い香の匂いが満ちて)、頭痛きまでありつれば(頭が痛いほどだったので)、げにさなりけりと(なるほどそういうことかと)、思ひあはせはべりぬる(合点がいったのでございます)。常にいと香うばしうものしたまふ君なり(源の大将殿はいつもとても香ばしくしていらっしゃる君ですから)。

\*このこと(まあそれは)、いと切にもあらぬことなり(どうでもいいことで)。人はいと有職にものしたまふ(大将はたしなみ深くていらっしゃるということです)。 \*「このこと」は過剰に香を焚き染めた大将への皮肉なのだろう。全体に冗句ないし軽口の口調。

\*なにがしらも(拙僧にしても)、童にもものしたまうし時より(大将の幼少でいらした時から)、かの君の御ためのことは(源君の御安泰については)、修法をなむ(祈祷を上げるようにと)、故大宮ののたまひつれたりしかば(故大宮のお申し付けがありまして)、一向にさるべきこと(偏に然るべく)、今に承るところなれど(今に至るまで承って勤めておりますが)、\*いと益なし(こういうことでは、その御利益が丸で無い)。 \*「なにがしら」の「ら」は複数を示す接尾語ではなく、客観視や再

認識の<～というもの>くらいの語感。 \*「いと益なし」は、自分が祈祷した甲斐が無い、という自嘲を、経典の御利益が無い、という言い方で洒落たのだろう。一種の軽口かと思う。

\*本妻強くものしたまふ(本妻は強くていらっしゃいます)。さる、時にあへる族類にて、いとやむごとなし(あのように今をときめく藤原一族なので、大変な御威勢です)。若君たちは、七、八人になりたまひぬ(御子たちは七、八人になっていらっしゃいます)。 \*「ほんさい」は現代語では通常語だが、当時は僧らしい堅い表現なのかも知れない。少なくとも、女房言葉には無い語感だ。

え皇女の君庄したまはじ(えみこのきみおしたまはじ、こちらの宮様でもあちらの本妻を圧倒なさることは出来ますまい)。また、\*女人の悪しき身をうけ(女の嫉妬深さで)、\*長夜の闇に惑ふは(成仏出来ずに苦しむのは)、ただかやうの罪によりなむ(丁度こうした不倫の過ちに拠って)、さるいみじき報いをも受くるものなる(そうした非常に辛い報いを受けてしまうものだ)。 \*「にょにんのあしきみをうけ」は<女は罪深いとする仏教思想。>と注にある。是は仏門僧ならではの言い回しで、業の一つに嫉妬があるようなので、普通に言えば<女の嫉妬深さ>のこと、かと思う。 \*「ちゃうやのやみ」は<生死の苦界に流転して真理の光明を見出すことが出来ない凡夫の生涯を例えている語。>と古語辞典にある。ざっと<成仏できない苦しみ>のことなのだろう。いや、どう言っても分からないが。

\*人の御怒り出で来なば(北の方の御怒りを買えば)、長きほだしとなりなむ(宮を長く重荷になるでしょう)。\*もはら受けひかず(大将とのお付き合いは、全く同意できません) \*「人」は<大将の北の方=本妻>のことで、この高僧は弥に北の方や藤原本家の肩を持つような印象だ。ただ、故大宮の信任が厚かったらしいことからすると、藤原殿よりは王家筋の近さを強く感じさせる。そういう家筋の高僧が、宮が藤原氏と張り合うような事は得策では無い、と訳知り顔で言う忠告は妙に説得力がある、のかも知れない。それにしても、大将自身の評価は殆んど無く、敢えて言えば「このこと、いと切にもあらぬことなり」といったところで、ずいぶん大将は軽い扱いで、違和感というか斬新ささえ覚える律師の物言いだ。そして、大将は周辺事情に面倒な関係者が多いので敬遠した方が良く、という言い方は、実は宮の立場を良く理解している親切心にも見える。尤も、アイツだけは止めて置いた方が良く、という忠告は、普通は恋に溺れている者に冷静な客観判断を勧める言い方だろうが、宮は大将に距離を置いているので、言われるまでもなく拒否する、という気持ちだろう。が、大将の身分の高さはそう簡単に拒める相手ではない、という難しい問題はありそうだ。 \*「もはら」は「専ら」で<ただひたすら>。「受け引く」は<同意する>。

と、頭振りて、ただ言ひに言ひ放てば(と頭を振って、もう遠慮も無しに言い放てば)、

「いとあやしきことなり(それは変な話です)。さらにさるけしきにも見えたまはぬ人なり(少しもそんな素振りの見えなさない方です)。よろづ心地の惑ひにしかば(昨夜は私が、どうにも気分がはっきりせず)、\*「うち休みて対面せむ」とてなむ(「少し休んでから後で対面する」と仰って)、しばし立ち止まりたまへると(大将が暫く山荘に居残っていらっしゃると)、ここなる御達言ひしを(此処にいる女房たちが言っていました)、さやうにて泊りたまへるにやあらむ(そういう理由でお泊りになったのでしょうか)。おほかたいとまめやかに(元来とても誠実で)、すくよかにもものしたまふ人をお堅くていらっしゃる方なのに)」 \*「うち休みて対面せむとてなむ」は注に<以下「立ち止まりたまへる」まで、御達の詞を引用。その中にさらに夕霧の詞を引用。「うち休みて」の主語は夕霧。>とある。であれば、「うち休みて対面せむ」を大将の弁として括弧に校訂すべき、かと思う。

と(と御息所は)、おぼめいたまひながら(不審に思いなさりながら)、心のうちに(内心では)、

「さることもやありけむ(そういうこともあったのかもしれない)。ただならぬ御けしきは(宮に対する大将の御恋心は)、折々見ゆれど(時々見えたが)、人の御さまのいとかどかどしう(その振る舞いがとても礼儀正しく)、あながちに人の誹りあらむことははぶき捨て(努めて人から非難されそうな事は避けて)、うるはしだちたまへるに(威儀を正していらっしゃったのに)、たはやすく\*心許されぬことはあらじと(間違いは先ずあるまいと)、うちとけたるぞかし(油断していましたぞ)。人少なにておはするけしきを見て(この山荘では宮が側近を少なくしてお住まいだという事情を見て)、はひ入りもやしたまへりけむ(大将は忍び込みなさったのかもしれない)」と思す(とお思いになります)。 \*「心許されぬこと」は<納得できないこと>と訳文にあり、注には<主語は御息所。夕霧を信頼。>とある。「許されぬ」は動詞「許す(承諾する)」(の未然形)+可能の助動詞「る」(の未然形)+打消しの助動詞「ず」(の連体形)らしい。「れぬ」は可能の助動詞「る」(の連用形)+完了の助動詞「ぬ」(の終止形)と同じ言い方なので紛らわしい。尤も、完了の助動詞「ぬ」の連体形は「ぬる」で、「~ぬこと」とあれば打消された事柄を示してはいそうだ。それと、「たはやすく」が「許されぬ」ではなく「あらじ」に掛かるであろうことも紛らわしい。

### [第三段 御息所、小少将君に問い質す]

律師立ちぬる後に(律師が立ち去った後に)、\*小少将の君を召して(宮付き女房の小少将の君を呼び出しなさって)、 \*「小少将の君(こせうしゃうのきみ)」は一章三段に「例の少将の君」と紹介された宮の側近女房、なのだろう。

「\*かかることなむ聞きつる(こうしたことをききました)。いかなりしことぞ(どういう経緯ですか)。などかおのれには(どうして私に)、さなむ、かくなむとは聞かせたまはざりける(これこれしかじかのことがあったと聞かせてくれなかったのですか)。さしもあらじと思ひながら(まさか、情交までは無いと思いますが)」 \*「かかること」は<大将の朝帰りとそれを宮への通いと見る噂>あたりを言ったものだろう。

とのたまへば(と御息所が仰ると)、いとほしけれど(非常に気まずいながらも)、初めよりありしやうを(初めからの経緯を)、詳しう聞こゆ(少将の君は詳しく話しました)。今朝の御文のけしき(今朝の大将のお手紙の内容や)、宮もほのかにのたまはせつるやうなど聞こえ(宮が読まない返事するようにと一言だけ仰ったことなどを申し上げ)、

「年ごろ、忍びわたりたまひける心の内を(数年来秘めていらした胸の内を)、聞こえ知らせむとばかりにやはべりけむ(宮にお知らせ申し上げたいというだけのようでした)。ありがたい用意ありてなむ(人目に立たないようにとの御配慮があつて)、明かしも果てで出でたまひぬるを(夜明け前にお帰りをなさったものを)、人はいかに聞こえはべるにか(誰が如何申し上げたのでしょうか)」

律師とは思ひも寄らで(と少将の君は御息所に告げ口したのを律師とは思ひも寄らずに)、忍びて人の聞こえけると思ふ(他の女房がこっそり知らせたと思っています)。



ものものたまはで(御息所は大將が宮と話をしただけとは言え直に応答し朝帰りしたことも確かめて、物も仰らず)、いと憂く口惜しと思すに(とても遺憾で情けなくお思いになって)、涙ほろほろとこぼれたまひぬ(涙をほろほろとこぼしなさいました)。見たてまつるも(少將の君はその御姿を拝し申し上げるのも)、いといとほしう(とても心苦しく)、「何に、ありのままに聞こえつらむ(どうしてありのままをお聞かせ申し上げてしまったのだろう)。苦しき御心地を(病苦で悪いご気分を)、いとど思し乱るらむ(ますます悩ましなされることだろう)」と悔しう思ひみたり(と後悔して控えていました)。

「障子は鎖してなむ(襖の錠は鎖してありました)」と(と少將は)、よろづによろしきやうに聞こえなせど(ともかくも事無きを得たように言い做し申し上げたが)、

「とてもかくても(実際の事の次第が如何であれ)、さばかりに(そう見做されかねないほどに近しく)、何の用意もなく(特に用心も無しに)、軽らかに人に見えたまひけむこそ(軽々しく男の人にお会いなさったという事が)、いといみじけれ(実に残念です)。うちうちの御心きようおはすとも(宮御自身のお気持ちでは潔白と御思いでいらっしゃっても)、かくまで言ひつる法師ばら(対象の噂をしていた若僧や)、\*よからぬ童べなどは(見習いの小僧たちは)、\*まさに言ひ残してむや(それこそ言ひ触らさない訳はない)。\*「よからぬわらんべなど」は注に<『集成』は「たちのよくない京童べ。都の無頼の若者たち」。『完訳』は「口さがない若者。ここは、僧たちに従う召使か」と注す。>とある。「かくまで言ひつる」が「法師ばら、よからぬ童べなど」に掛かると読んで<若僧と小僧>くらいに取って置く。\*「まさに」は<正に、ちょうど>で、古語辞典に拠れば、下に反語を伴うと<それこそ～しない訳はない>という言い方になるらしい。「言ひ残す」は<言わずに置くの意>と注にある。

人には(世間の人には)、いかに言ひあらがひ(どう言い繕って)、さもあらぬことと言ふべきにかあらむ(そんな事はないと言えましょうや)。すべて(どの女房も全て)、心幼き限りしも(至らぬ者ばかりが)、ここにさぶらひて(この山荘に仕えているのか)」

とも(とさえも御息所は)、えのたまひやらず(最後まで仰れません)。いと苦しげなる御心地に(とても悪い御病態のところに)、ものを思しおどろきたれば(不安を抱え気が休まらずにいらっしゃるので)、いといとほしげなり(とても大儀そうです)。

気高うもてなしきこえむとおぼいたるに(御息所は宮を気品高くお守り申そうと御思いであったのに)、世づかはしう(色恋沙汰で)、軽々しき名の立ちたまふべきを(軽々しい浮名が立ちなさりそうなのを)、おろかならず思し嘆かる(非常にお嘆きになります)。

「かうすこしものおぼゆる隙に(このように私が少し正気でいるうちに)、渡らせたまうべう聞こえよ(お越し頂くよう宮に申し上げなさい)。そなたへ参り来べけれど(私があちらへ伺うべきところなれど)、動きすべうもあらでなむ(動けそうにありませんので)。見たてまつらで(お会い申さずに)、久しうなりぬる心地すや(久しくなった気がします)」

と、涙を浮けてのたまふ(と涙を浮かべて仰います)。

参りて(少將の君は宮のお部屋に参上して、子細は告げずに)、

「しかなむ聞こえさせたまふ(御息所がこのように仰せです)」

と\*ばかり聞こゆ(とだけ申し上げます)。 \*「ばかり」については、注に『完訳』は「小少将は自分が密告者のようになりかねないので、ばつがわるい。御息所の言葉だけを伝えた」と注す。副助詞「ばかり」限定の意に注意。>とある。従って、「参りて」の方に左様補語明示する。

#### [第四段 落葉宮、母御息所のもとに参る]

渡りたまはむとて(宮は母君のところへ出向きなさるということで)、御額髪の濡れまろがれたる、ひきつくるひ(御額髪が涙で濡れて団子になっているのを梳かし直して)、単衣の御衣ほころびたる、着替へなどしたまひても(ひとえの御着物が綻びているのを着替えなどして支度なさっても)、とみにもえ動いたまはず(直ぐには動きなさいません)。

「この人びとも\*いかに思ふらむ(此処にいる女房たちも昨夜の事を母君にお知らせ申すことを如何思っているのだろう)。まだえ知りたまはで(誰もまだお知らせ申さず、母君は昨夜の事をまだご存じなくて)、後にいささかも聞きたまふことあらむに(後で少しでもお聞きになることがあった時に)、つれなくてありしよ(私が何も話さずにいた事を、水臭い)」 \*「いかに思ふらむ」の対象体は何か。「まだえ知りたまはで」と続くので、宮は女房が御息所に昨夜の事を話し聞かせたかどうかを考えている、と読むのが自然だ。だから、「思ふらむ」は<思っているのだろうか>ではなく<思っただろうか>という意味にも見えるが、「思ふらむ」を<話したか>とは言い換えられないので、対象体を<御息所に話すこと>として置く。そこで、「まだえ知りたまはで」の前に<誰もまだ知らせずに>を補語する。

と思しあはせむも(と思い合わせなさるのも)、いみじう恥づかしければ(非常に気が引けるので)、\*また臥したまひぬ(何をどう話して良いか分からずに、また臥せってしまわれました)。 \*「また臥したまひぬ」は「いみじう恥づかしければ」という理由付けで、一見意味が通るように見える。が、後で御息所が「つれなくてありしよ、と思しあはせむも」が宮をして「いみじう恥づかしければ」となるには、今から宮が御息所に<つれなくてあらむ>わけだが、宮はそれで良いのかと思悩んだからこそ「また臥したまひぬ」となるのだろう。論理的にこの文は如何はしいかと、左様に補語する。

「心地のいみじう悩ましきかな(気分がとても優れません)。やがて直らぬさまにもありなむ(このまま直らないほうが)、いとめやすかりぬべくこそ(いっそ気楽です)。\*脚の気の上りたる心地す(足の具合が悪くて歩けない気分です)」 \*「脚が上がる」という言い方は<足の動きを失う。動けなくなる。>と古語辞典にある。踏み下ろせない、ということだろうか。「あしのけののぼる」も同じ言い方なのだろう。

と(と言って宮は)、\*押し下させたまふ(女房に脚を揉ませなさいます)。ものをいと苦しう、さまざまに思すには(物事をとても難儀にあれこれ思い悩みなさって)、気ぞ上がりける(宮はのぼせてしまわれたのです)。 \*「おしくだす」の「下す」は「脚が上がる」という症状に対して<治療する>を意味するようで、「おしくだす」は<押して治療する=指圧する=揉む>という言い方らしい。たぶん、「下っている」症状を治療するには「押し上げる」と言うのだろう。とはいえ、「上げ下げ」という比較概念の対症療法は曖昧なようでも、結局の所、個体の健康基本線は自身の総合治療力によってしか維持できないから、その補助たる治療に於いて、基本線に対して本質的な言い方をしているようにも見える。

少将(少将の君は)、

「上に、この御ことほのめかし聞こえける人こそはべけれ(御息所に昨夜の事を事ありげにお聞かせ申した者がいるようです)。いかなりしことぞ(どういう子細か)、と問はせたまひつれば(とお尋ねがございましたので)、ありのままに聞こえさせて(ありのままを申し上げて)、御障子の固めばかりをなむ(襖戸の鍵を掛けたとだけ)、すこしこと添へて(少し言い加えて)、けぎやかに聞こえさせつる(具体的にお話し申しました)。もし、さやうにかすめきこえさせたまはば(もし御息所がその事をお確かめなさろうとなさったときは)、同じさまに聞こえさせたまへ(同じようにお話し申して下さい)」

と申す(と申します)。嘆いたまへるけしきは聞こえ出でず(御息所がお嘆きでいらっしやる事は宮に申し上げません)。

「さればよ(それで私をお呼びなのか)」と、いとわびしくて(と宮はとても情けなく)、ものものたまはぬ御枕より、雫ぞ落つる(物も仰らずに臥せったままお泣きなさいます)。

「このことにのみもあらず(昨夜のことだけではなく)、\*身の思はずになりそめしより(夫の死で不幸な身の上になって以来)、いみじうものをのみ思はせてまつること(とてご心配をお掛け申して来ているので)」 \*「身の思はずになりそめしより」は注に<柏木との不本意な結婚をさす。>とある。しかし、この解釈は「なりそめ」の言葉に引かれ過ぎているのではないか。藤原御曹司との結婚は、藤原殿の申し入れを、父朱雀院も認め、母御息所も納得し、宮自身もその気になって、取り結ばれた。むしろ、藤原君自身の気乗り薄が宮には期待外れだったかも知れないが、絶望するほどの不幸ではなかった。だからこそ宮にとっては、藤原君の死が不幸の始まり、となった筈だ。

と(と宮は)、生けるかひなく思ひ続けたまひて(生きている甲斐も無いように思い続けなきて)、 「この人は(あの大将殿は)、かうても止まで(これで終りではなくて)、とかく言ひかかづらひ出でむも(何かと言い寄ってくるであろうことも)、わづらはしう(鬱陶しく)、聞き苦しかるべう(耳障りになるだろうと)」、よろづに思す(悲観に暮れなさいます)。

「まいて(その上)、いふかひなく(抗弁の甲斐もなく)、人の言によりて(人の陰口で)、いかなる名を朽たさまし(どんな浮名を立てられることやら)」など、すこし\*思し慰むる方はあれど(などと、情交に及んでいない潔白の自負で少しは気を取り直しなざる面はあるものの)、 \*「思し慰むる方」は<気を取り直しなざる点>で、それは<潔白の自負>から来るものなのだろう。此処の文意は与謝野訳文に従う。

「\*かばかりになりぬる高き人の(あれほど幸せだった皇女が)、かくまでも(未亡人になったからと言って、これほどに)、すずろに人に見ゆるやうは\*あらかし(軽々しく男に会うようなのははしたない)」と(と噂立つであろう)、宿世憂く思し屈して(身の不運を嘆きうなだれて)、夕つ方ぞ(夕方になって)、 \*「かばかりになりぬる高き人」は注に<皇女の意>とある。「高き人」は<皇女>かも知れないが、「かばかりになりぬる」は<あれほど幸せだった>と言っているように、私には聞こえる。何れ、「かばかり」「かくまでも」の客観語感、宮の内心文ではなく女房や世間の評判ないし其を想定した思考、を示しているのだろう。 \*「あらかし」は「高き人」に掛かるのだろう。

「なほ、渡らせたまへ(是非お越し下さい)」

とあれば(と御息所から催促があったので)、\*中の塗籠の戸開けあはせて(宮の西部屋と御息所の北部屋の間にある屋敷倉の戸をどちらも開け合わせて)、渡りたまへる(お渡りなさいます)。\*「中の塗籠」は、一章二段の山荘の間仕切り配置の当初の説明に無く、そも母屋が有るのか無いのか分からない変な印象だったが、母屋に相当する空間はあったが、其処を含む東側を祭壇に仕立ててあった、というように思ってしまう。何れ私には、こうした建物の生活実感は無い。

#### [第五段 御息所の嘆き]

苦しき御心地にも(優れない御病態にも関わらず)、なのめならずかしこまりかしづききこえたまふ(御息所は恭しく畏まって宮をお迎え申しなさいます)。常の御作法あやまたず(普段の御作法通りに)、起き上がりたまうて(起き上がりなさい)、

「いと乱りがはしげにはべれば(とても見苦しい有様ですので)、渡らせたまふも心苦しうてなむ(お越し頂くのも気が引けます)。この二、三日ばかり見たてまつらざりけるほどの(この二、三日ほどお会い申し上げなかったのが)、年月の心地するも(何年にも思えますのも)、かつはいとはかなくなむ(一方では心細くなります)。

\*後、かならずしも、対面のはべるべきにもはべらざめり(親子の縁は、来世で必ずしも対面できるものでもないようでございます)。\*まためぐり参るとも、かひやははべるべき(また生まれ変わったとしても、親子の縁は無くなっているので意味はありません)。\*「のちかならずしも」は注に<「後」は、来世。親子は一世の縁という。『河海抄』は「一世には二たび見えぬ父母を置きてや長く吾が別れなむ」(万葉集巻五、八九一)を引歌として指摘。>とある。ウェブ検索した幾つかのページに拠ると、この引歌は山上憶良が、熊本の役人が役目柄上京する途中で広島で病死したことを、役人の悲哀とでも共感したのか、本人に成り代わって詠んだ心算の歌らしい。\*「まためぐり参る」については、注に<仏教の輪廻転生の考え。反語表現。『集成』は「もう一度この世に生を享けましても、何にもならぬことでございます。お互い顔も見知らぬであろうからである」と注す。『源注拾遺』は「契りありて此の世にまたも生まるとも面変はりして見もや忘れむ」(後拾遺集哀傷、五六六、藤原実方)を引歌として指摘。>とある。いずれにしても、寿命の残り少なさを思い、死に別れの悲しさを表わした言い方ではありそうだ。

思へば(そう考えてみれば)、ただ時の間に隔たりぬべき世の中を(結局は時が経てば縁も消えてしまう親子の仲を)、あながちにならひはべりにけるも(深く思い込み過ぎてまいりましたのも)、\*悔しきまでなむ(馬鹿げていたと悔やまれます)」 \*「悔しきまでなむ」は信じていた娘に裏切られた、みたいな御息所の恨みが有りそうだ。が、御息所は、宮と大将が近付くこと自体を懸念していたのではない。律師は、大将では相手が悪いから付き合うのは止せ、と言っていたが、御息所の目論見はどうすれば宮を最大限高く売れるかという算段にあった。だから、藤君の笛を大将に託して、あなたが本命候補だよ、と仄めかしたのだ。それを、安々と会ってしまうとは、人の苦勞を無にするのか、といったところだ。そんな計算も立たないように育てた覚えはない、くらの気持ちかも知れない。しかし、王家筋に生まれたのと、王家に生まれたのでは、天地の違いだ。王家の者は苦勞してはいけない。それは官僚の失点になるからだ。それに引き換え、王家筋の者は平民と同じ生活苦の中で、王家の誇りを補佐する生き方を強いられる。其を自らの誇りと、自己愛も込めて多くの人は考え

るのだろうが、計算は生活の知恵で、それとは別次元で身に付けるものだし、普通は身に付く。しかし、王家の者には身に付かない。宮は内親王だ。御息所腹ながら、御息所とは生まれが違った。藤君に先立たれて、実生活の生活苦はある筈なのに、宮には其を生活苦と認識する思考方法や行動様式が無い。逞しい生活力や生命力とは無縁で、座して餓死するを厭わない。それが御息所には不安でならない。我が子を不憫にも思う、のだろう。

など泣きたまふ(などと言ってお泣きになります)。

宮も、\*もののみ悲しう取り集め思さるれば(宮も御息所に心配を掛けてばかりなのを悲しく重ね重ね思えなさって)、聞こえたまふこともなくて見たてまつりたまふ(お応えしなさりようもなく母君にお会い申し上げなさっていらっしゃいます)。 \*「もののみ悲しう取り集め思さるれば」は「このことにのみもあらず、身の思はずになりそめしより、いみじうものをのみ思はせてまつること」でいらっしゃる御息所を裏切った形になったことが我ながら情けない、みたいな気持と解して置く。が、だとしたらひどく分かり難い言い方の文で、本当にこれで良いのか不安だ。が、今のところ他に解しようがない。

ものつつみをいたうしたまふ本性に(宮は内気できまりが悪いことを先ず隠しなざる性格で)、際々しうのたまひさはやぐべきにもあらねば(はきはきと物を仰ってさっぱり出来る方ではないので)、恥づかしとのみ思すに(居た堪れないとばかりお思いになので)、いといとほしうて(御息所も不憫になって)、いかなりしなども(どういうことだったのかなど)、問ひきこえたまはず(問い質し申しなさいません)。

大殿油など急ぎ参らせて(御息所は部屋明かりなどを灯させて持って来させて)、御台など(宮の夕餉の御膳などを)、こなたにて参せたまふ(こちらで差し上げなさいます)。もの聞こし召さずと聞きたまひて(宮が何も召し上がらないとお聞きになって)、とかう手づからまかなひ直しなどしたまへど(あれこれと御息所ご自身で宮が食べ易いように揃え直しなどなさったが)、触れたまふべくもあらず(宮は箸を付けようともなさいません)。ただ御心地のよろしう見えたまふぞ(ただ、そのように立ち働く御息所の御気分が良さそうに見えなさるのを)、胸すこしあけたまふ(宮は少し安堵なさいます)。